



阿蘇山が噴火しました

8日未明、阿蘇山が噴火したとのニュースが入りました。熊本地震の直後に小さな噴火は発生しましたが、今回の噴火は36年ぶりという規模と報道されており、降灰は300km以上離れた高松市でも確認されています。現在、火山性微動と呼ばれる現象はかなり収まっていますが、地殻変動データからは地下深部のマグマが上昇していると推察されており、「すぐにこれで収束」という事にはなりそうもありません。

今回の噴火での最大の特徴は噴火直後の降雨により、電線や変電装置に付着した火山灰による停電が比較的広域な範囲で発生した事です。これは今後の火山BCP対策としても重要な観点かもしれません。降灰による道路通行状況の悪化のため、故障した電気設備へ作業員がなかなか近づけないという問題が発生したようです。

ちなみにこの噴火とほぼ同時刻にマグニチュード1.4の地震が火口近辺で発生しましたが、この噴火により、熊本・阿蘇地方で地震活動が活発化するといった変化は観察されていません。

下の図は群馬大学の早川由紀夫教授がまとめた降灰データで、衛星データ、市町村発表データおよびツイートされた写真等を元にまとめられたようです。早川氏はおよそ10万トンの噴出物があったと推定しています。



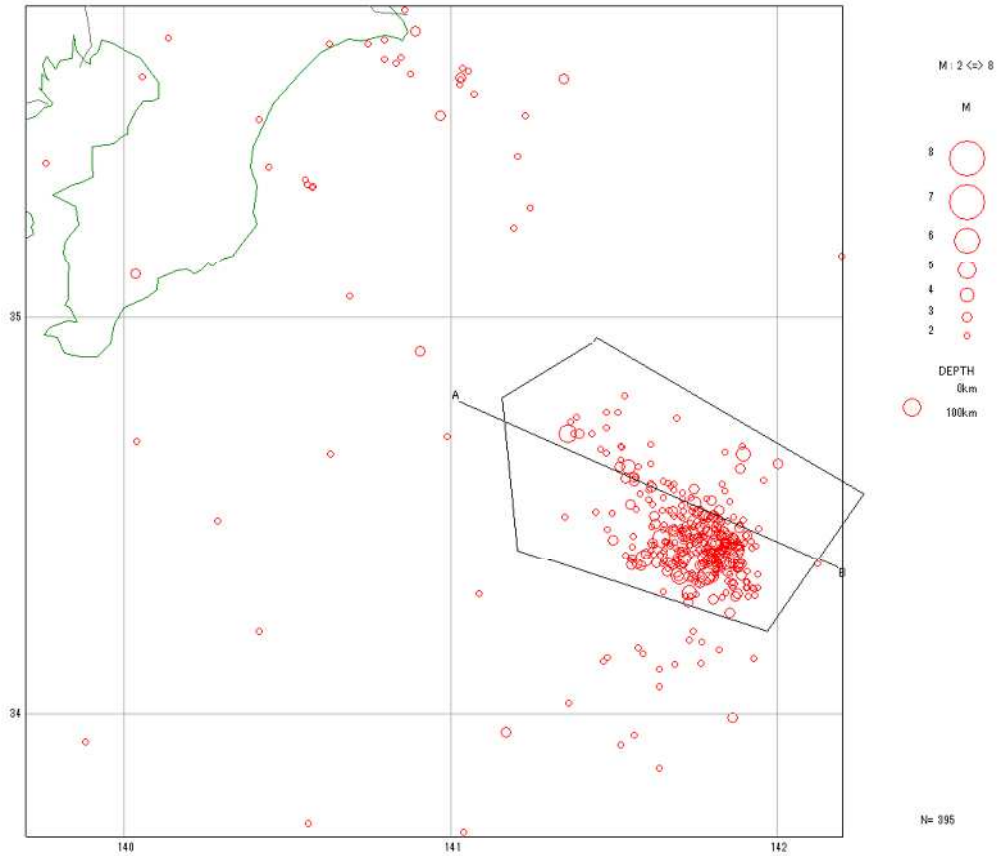
房総沖の活動

9月23日に房総沖でM=6.7の地震が発生し、その後の推移に注目していますが、10月8日までのデータを用いた解析でもまだ、通常の地震活動とは異なった地震活動が続いていると判断しています。具体的には比較的規模の大きな地震がまだ続けて発生しています。これは今後さらに大きな地震が発生する可能性がまだ存在している事を意味しています。

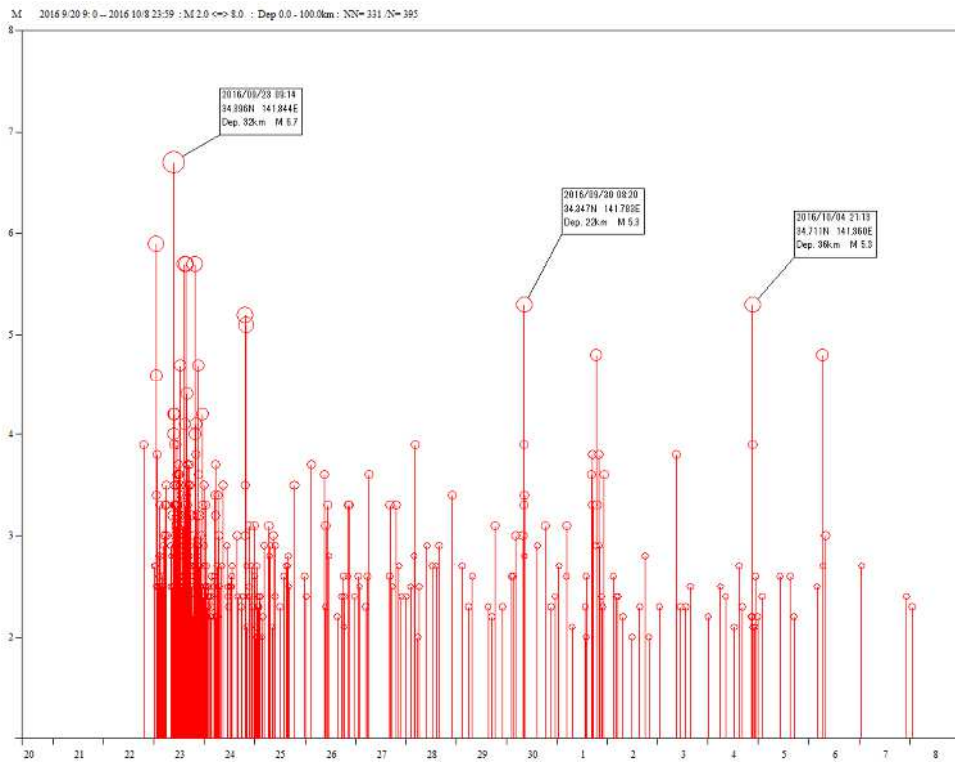
次のページの図は、9月20日から10月8日までの房総沖の地震活動です。上の図は地震の空間分布です。下側の図は、上の図の5角形の部分について、地震活動がどのように時間変化しているかの図です。



2016 9/20 9: 0 -- 2016 10/8 23:59



9月20日から10月8日までのマグニチュード2以上のすべての地震を图示



横軸が日付、縦軸がマグニチュードの図 (MT 図と言います)。

縦軸の赤い線が長いほど大きなマグニチュードの地震が発生している事を意味します。

比較的大粒の地震がまだ続いている事が問題。上の図の中の五角形の領域の地震を图示しています



日本列島陸域の地下天気図®

8月22日のニュースレターに引き続き、日本列島陸域について解析を行いました。この地下天気図®では、日本列島全域を同時に解析するため、東日本大震災以降の5年間の地震活動データのみを使っています。つまり5年間という地震学としては比較的短期間の地震活動の”ゆらぎ”の解析となっています。右上の図が最新の10月8日時点の地下天気図です。右下の8月19日時点のものと比較しますと、中国・四国地方の青い静穏化領域は残っていますが、少し中国地方にその領域の中心が移動したようです。また若狭湾周辺の異常が消えています。こちらは異常の形が細長く、かつ小さいため、地震が発生するとしても大きなものは考えにくい状況です。

それ以外では、伊豆半島の異常がかなり小さくなっている事が気になりますが、もともとの静穏化異常の領域が狭く、こちらも地震が発生するとしてもマグニチュード6程度と推察され、大きな被害が生ずるマグニチュード7クラスではないと考えています。

それ以外の地域では、大きな変化が発生していない事がわかります。

